Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

# 歴史文化の可能性と課題 ： 『LINK』２号特集「”地域の再生”と歴史文化」を読む（LINKを読む）

三村，昌司

(Citation)
Link ： 地域・大学・文化 ： 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,3:92-96

(Issue Date)
2011-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003376

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003376

LINKを読む

# 歴史文化の可能性と課題

## ――『ＬＩＮＫ』２号特集「“地域の再生”と歴史文化」を読む

三村　昌司

小文は、この『LINK』の前号に掲載された特集「〝地域の再生〟と歴史文化」（以下、「特集」とよぶ）を「論評してほしい」という依頼に応じて執筆されたものである。

学術雑誌の特集を次の号で論評するという話は、『飯田市歴史研究所年報』が各号で前号の論評を行っているものの、珍しいことではないかと思う。

そもそも、自分が適役かも含めてどのように論評するか迷ったのだが、結局のところ、私の地域連携事業へのかかわりはごく浅い経験であって、特集について評するほどの力量も実績も不十分と言わざるをえない。

そこで、特集を読んで考えたことを書き連ねて、論評に代えることをお許しいただきたい。しかし、一読者として、また、地域連携事業にかかわっている人間として、出された成果に対し感想を書くという作業は、内容はともかくとして、研究や実践の継続性という一点で、意義があろうかとは思っている。

＊

さて、いわゆる「書評」「論評」では、最初に評すべき対象の内容を紹介するものだが、下手なまとめは各論考の内容を損なうと考え、あえて省略したい。そのうえで、特集に通底するものを「特集にあたって」を参照しながらあえて筆者なりに見いだすならば、次のようになろう。

「現代日本において地域及び地域の歴史文化は危機的状況にある。そこで、地域の歴史文化を主体的に担う住民の活動から、〝地域の再生〟の手がかりを見いだす。」

とはいえ、特集では〝地域の再生〟と謳っていながら、実は「再生すべきもの」が何なのかを、明示的に述べていない。ふつう「再生」というからには、もともと「なにか」があったのだが、無くなったので（あるいは無くな

りそうなので）それを再生しようという意味合いだと考えられる。しかし、得てしてそれは「昔はのんびりしていて良かった」とか「昔の人は温かみがあった」、ひいては「昔の日本は夢と希望があった」というような懐古主義的発想へと結びつき、「今の日本はダメだ。昔の日本を取り戻さなければならない」という主張へとつながっていく。あるいは、過去を正当化するためのレトリックとして現状の否定と「再生」が謳われることもあろう。

しかし、特集では「地域の再生」という言葉にダブルクォーテーションがついていることから、「地域の再生」そのものについても相対化しようとしている意図が感じられる。少子高齢化やグローバル化の進展によって、地域社会や地域経済が危機的状況に陥っている点は各論考とも認めるところだが、そこから「昔を取り戻そう」という意味合いでの「再生」という発想へは至らない。

たとえば、岡田論文ではそのことが最も鋭く問われていて、「そこでは、常に、「どのような広がりの地域」の、「何を」再生、振興、活性化するのかということが問われ、しばしば利害対立がおこる」（八頁）と述べられ、「地域の再生」そのものが、現実社会のなかで利害対立の争点になってきたと冷静に語られる。

また、善見論文では「町はひとりでに「作」られるものでない。そこに暮らし生きる人々が「創」っていくものである」（六〇頁）と述べられる。ここには「再生」ではなく「創生」とでもいうべき発想が語られている。

このように、特集は「もともとあった地域を再生する」という視点には立っていない。

では、特集がもつ〝地域の再生〟とは、何か。もちろん、各論考による違いはあるが、「人間の生活領域としての地域において、人々の生きがいの基盤に地域歴史遺産を据える」という風に表現できるのではないか。「生きがい」という言葉は、岡田論文・岡庭論文で使われている（二四頁、二七頁）。あるいは、善見論文では「子どもたちが生き生きと育つ」ためのものとして、地域歴史遺産が位置づけられている（六〇頁）。

そのうえで、地域歴史遺産を活用するために、岡田・岡庭・善見論文ではとくに住民の主体性形成が重視され、櫻井・大槻論文では行政の役割の重要性が主要な問題となっている（むろん、どの論考も両者を意識していることは言うまでもない）。これに『LINK』一号の「大学の役割」を重ね合わせるならば、〈住民・行政・大学の三者によって地域歴史遺産を活用し〝地域の再生〟を図る〉というモデルを描くことができるだろう。

しかし、住民・行政・大学の三者連

携という発想じたいは、とりたてて珍しいものでもない。歴史に限らず、あらゆる分野での「地域再生」で理想とされるモデルであろう。だが、特集が提起しているのは、この三者連携を前提にしたうえで、「地域歴史遺産にしかできないもの」を提示しようとする点にある。

例えば、岡田論文は「（地域の――三村注）「個性」を学ぶということは、自らが生きている生活領域としての地域の歴史的形成過程を知ることであり、さらにそれに規定された地域の未来像を展望することにつながる」（二二頁）と述べる。他の論考でも、地域歴史遺産が、（当然だが）「歴史的に蓄積されてきたもの」であるがゆえに、その地域の人々にとって重要な意味を持つというスタンスを取っている。そしてまた、「歴史的に蓄積されてきたもの」には、文字史料や遺物にとどまらず、景観・自然をもそのなかに含み込むものであるということは、櫻井論文がいうように「歴史文化の調査というと、身近な時代や身の回りのことを捨象して理解される場合が多い」（四七頁）という現状からしても、改めて強調しておかねばならないだろう。

＊

さて、特集の意義を以上のように理解したうえで、そこからみえてくる射程と課題について考えてみたい。

特集が持つ意義は、先にも述べたように歴史文化が人々の「生きがい」に資するということであった。だとするならば、その意義がもつ射程は、〈「地域の再生」が「産業振興」「観光資源の発見」であるという考え方〉を、いかに打破していけるかという点にあるのではないか。以下、そのことについて述べてみたい。

「地域の再生」といえば、地域経済の危機を前提として、「まず第一に地域経済の再生である」という文脈で語られることが多いように思う。たとえば大型商業施設の誘致や外形的な「レトロ化」などによって集客を図り地域経済再生を目指す方策があろう。あるいは、「地域力」というようなフレーズで、地域にあるものを「再発見」し、産業や観光の振興に結びつけていく議論もある。これらを仮に「地域経済再生論」と呼んでおきたい。

もちろん、地域経済が危機的状況にあることは言うまでもないし、特集の各所でもそのことは触れられている。しかし、問題にしたいのは、「地域経済再生論」と特集とでは、その再生の論理が異なる点である。

「地域経済再生論」は、その方策は様々だが、いかにして市場経済のなかで地域経済を立て直すかということを目的にしている点では共通している。しかし、この発想がもつ陥穽は、それがあいも変わらず「経済的に成功した地域」と「不成功である地域」を截然

と切り分けてしまう点にある。また、たとえ経済的に成功したとしても、中長期的には、将来の産業構造の変化やグローバル経済の展開によっては、またしても同じような苦境に立たされしまう可能性がある。

さらに、「地域経済再生論」が持つ最大の問題は、地域経済を活性化して地域を再生するつもりが、実はそれ自身が市場主義原理のなかでの方策であるがゆえに地域経済を苦境に追いやった市場主義原理的観念をさらに強化してしまうという、きわめて不合理な帰結を取らざるをえない点にある。そうだとするならば、「地域再生」の鍵は、どうやって市場主義原理的観念を無効化していくかという風に問われなければならないのではないか。

一方、特集では、地域を歴史文化によって生きがいのあるものととらえ直して〝地域の再生〟をめざすという論理になっている。経済再生については語られていないが、おそらくあくまで「その次に来るかもしれないもの」に過ぎない。

前述したように、「地域再生」の鍵は、いかにして市場主義原理的観念を無効化していくかという風に問いを立て直されなければならない。それならば、「経済再生」を直接目指さずに歴史文化によって〝地域の再生〟を試みる考え方は、市場主義原理的観念を無効化した社会のあり方を考えるための、ひとつの重要なヒントになりうるのではないだろうか。そして、このことこそが、特集のもつ可能性といえよう。

＊

最後に、歴史文化が持つ課題について述べておきたい。

なによりも、歴史文化は万能ではない。地域にある問題をすべて解決してくれるようなものではない。また、歴史文化は苦境にある地域社会を〝再生〟するためのものではあるが、だからといって産業・観光を振興しようとする考え方を即座に排除するものでもない。

そもそも「地域」といっても、その対象となる範囲は実に多様で、町内会や近世村レベルのミクロな地域から地方都市、果ては国際的なエリアにいたるまで文脈に応じて様々に用いられる。

このように述べると、「ではどのレベルならば歴史文化が〝再生〟をもたらすのか」という問いが向けられるかもしれない。その問いに対しては、岡田論文が述べているように「本源的には、社会的動物としての人間の生活領域」（七頁）が最も機能する可能性が高いものとして考えられそうである。

では、その他のレベルの地域の〝再生〟に、歴史文化は寄与しないのか。この問いに対しては、機能するかもしれないし、機能しないかもしれない、と曖昧に答えるしかない。というより

は、機能の仕方を緻密に検討しなければならない、というべきだろう。

ただ、小文で述べたかったのは、歴史文化が市場主義原理的観念を無効化しうる可能性を持っている、ということであった。逆に、歴史文化に対し、あらゆるレベルの地域で、経済再生も含んだ様々な問題を解決できるという全能性を持っていると信じるようなことがあれば、それは「歴史文化原理的観念」になってしまうだろう。言いたかったのは、歴史文化を経済再生という難問に対する解決策として用いるのではなく、歴史文化によって難問そのものを無効化してしまえるのではないか、その方途が課題だということである。

また、もうひとつ挙げておきたい課題として、歴史文化がなぜ〝地域の再生〟を担えるのか、ということがある。この点については、特集ではないが、村井論文が地域史が「複数の物語に開かれている」（一一一頁）という観点から問題にしている。

村井論文は「「地域の再生」をめぐる理論的課題」というタイトルだが、尼崎市富松地区のまちづくりの取り組みに触れており、「地域の再生」を理論と実践に弁別せず考察したという意味で興味深い。

村井論文がいうように、地域史――これを歴史文化と置き換えてもいいと思う――が「開かれている」とするならば、それゆえに歴史文化が多様な人々の参入を可能にするネットワークを形成できる、という論理はわかる。しかし、だとするならば、その「無限の開放性」が、更新され続けるものでありながら、なぜ地域住民の共同性を担保しうるのか、という疑問が湧いてくる。

共同性とは、空間的概念でもあるが、時間的概念でもある。すなわち、一定の時間「物語」を共有することではじめて現実に成立する性質のものであろう。しかし、歴史文化が無限に解放され更新され続けるものであれば、それは人と人が歴史文化を結節点としてつながった瞬間、またばらばらになってしまわなければならないのではないか。さらに、個々の人間どうしの関係だけでなく、どのレベルに「地域」を設定するかという境界線についても、常に引き直し続けることになると考えられるが、そのことである空間の共同性は維持することができるのか。

固定化は排除を生み、流動化は拡散を招く。生滅を繰り返さざるをえない「歴史文化」と、一定の時間と空間の「共有」を必要とする共同性をめざす現実とを、いかに折り合わせていくか。地域連携の理論と実践は、そのアポリアとの苦闘であり、しかしアポリアであるからこそ、考察される意味があるのかもしれない。